

University Academic Repository

E-learning導入を想定した聴覚教材：
基本構造の定着を最優先したものとして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 秀之, タカノ, ヒデユキ, Takano, Hideyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/136

E-learning 導入を想定した聴覚教材

—基本構造の定着を最優先したものとして—

The Digital Contents for E-Learning System (Script)

—Focus on teaching the basic structure of English—

高 野 秀 之

Hideyuki Takano

<概 要>

本論考は、大学で英語を学ぶ準備段階にある学生に E-learning 教材を提供し、基本的な文法項目を復習する支援を目的とした聴覚教材である。その方法が、ネット上にデジタルコンテンツを掲載し、学生に必要な情報を提供するという点においては、それほど目新しいものではない。しかし、その究極の目的は、いかなるレベル、興味、到達目標、専門領域の学生にも対応可能な教材を、必要十分な IT 環境環境にある教員に利用可能なものとして提供することにある。ただし、その実現のためには、教育現場における教材というものの捉え方を、将来的には一新しなければならない。

導入教材部分では、言語に関する知識の必要性を示唆しながら、高校で学ぶ英文法の解説がほどこされている。なぜなら、本論考は、大学生が身につけるべき英語の能力というものを、学習者の専門分野はもちろんのこと、幅広い知識と教養に支えられているものであると考えるからである。

授業教材部分の抜粋は、より実践的な授業形態を意識した構成になっており、授業の解説を理解した学生は個々のペースで学習を進めることができる。最終章には、更なる復習のための方向付けとして、学習計画も提供されている。

聴覚教材の性質上、「0. オリエンテーション」から始まる部分は会話体で表記されている。今後、文字情報や動画が異なる認知刺激として提供されることにより、その違和感は払拭されるであろう。

<キーワード>

E-learning、英文の基本構造、名詞句、述語動詞、意味の中心となる名詞、限定詞、修飾部分、時制、様相

序 文

大学の授業に E-learning を効果的に導入し、学生に英語の基本構造を定着させる教育支

援体制の強化が求められている。こうした現状を踏まえ、各大学では E-learning の導入に必要な準備がすすめられている。しかし、実際に E-learning を導入するまでには、学内の IT 環境を整備し、教授者側の技術を向上させてゆかなければならない。いくつかの大学では、通常の業務にこの二点の取り組みを上乗せするだけの余力がないことを理由に、E-learning の導入が先送りにされている。また、組織全体が一斉に新システムの導入に取り組むことは困難であるという判断から、E-learning の導入は見送られている。それに比べ、以前から本学には学生支援体制としてのネットワークサービス（学生ナビゲーションシステム）が整備されており、しかも、教職員が一丸となって何かに取り組もうとする土壌がある。この利点を活かせば、必ずや、学生に充実した教育サービスが提供できると思われる。

1. 「嘉悦の英語」プロジェクト

大学の授業には、いくつかの不透明感が残されていると言われている。例えば、各大学で学生が教わる英語教育の到達点はどこにあるのか、専門分野として英語を学ぶ学生とそうでない学生とでその到達点は異なるのか、毎回の授業ではどのような学生に対して、どのような内容が伝えられているのか、それぞれの学生はどの程度まで授業に満足しているのか。こうした声に応えるために、文部科学省は各大学に「自己点検・自己評価システム」の立ち上げを要請するようになった。どの大学も、その内外からの評価を通じて、大学の教育レベルを高める努力をするようになりつつある。しかし、実際に行われてきた各種評価システムは毎回の授業にどのような質的な向上をもたらし、その結果、どのような満足感を学生、保証人、社会に提供することができたのであろうか。こうした疑問を抱いて以来、本学（経営経済学部）の英語教員は独自の方針を打ち立て、卒業までの教育プログラムを検討するようになった。

(1) 教育方針

会議を通じて打ち立てられた教育方針は、「授業を通じて学生が身につける英語の運用能力を社会に保証する」というものである。多様化する学生に対応するためには、いかなる状況で本学に入学してきた学生も、卒業までには社会人として通じるまでの教育を施さなければならない。専門分野の知識は伝えることができなくても、その理解に役立つ情報を英語担当者から提供することができる。本論考に続く「読解教材編」では、特にこの点を強調したいと考えている。

(2) 教育目標

卒業生の学力を社会に保障するためには、「一定レベルの目標を設定し、そこに達するまで、何度でも繰り返し学習させる」ことと、「すでに目標まで到達している学生には、更なる目標の設定を促し、その実現までのサポートを行う」ことが必要となる。これら二つの教

育目標に対応するため、学生にリメデリアルクラスを提供している。学習習慣の定着を支援するクラスと、ESP（English for Specific Purpose）の導入授業に関しては、別な機会で報告したい。

(3) 授業目標

数年前までのように、コンピュータの電源を入れ、キーボードを操作して文字情報を入力し、WEB上にある各種データを入手することだけでは、学生の学習意欲を高めることができない。このような状況にあって、英語担当教員は「多様化する学生の要望に耐える授業内容の整備」が必要であるということを感じていた。

本学の学習支援サービス（学生ナビゲーションシステム）を利用すれば、毎回の授業に最新の情報を提供することができる。このシステムを利用することにより、学習者の感覚器官に同時に複数の刺激を与えること、即ち、「マルチメディア教材の効果的な利用」ができる環境にある。情報媒体を効果的に利用した語学学習の効果はさまざまな分野でも実証されているので、その結果に倣い、より質の高い教育が可能なのである。

更に、授業効果を高めるため、評価に至るすべての授業内容に対する「フィードバックの充実」が求められている。大学の授業に対する不透明感の多くは、最終評価に至るまでの過程と、結果に対する説明責任の曖昧さから生じることが多い。この目標の達成は教育の質を保証するという観点から、当然のことなのである。

2. E-learning の歴史

何を、どの程度まで提供するのが決まったら、それをどのように実現させるのが問題となる。そこで、英語担当者は E-learning システムの導入を検討するようになった。早い時期から情報を集めていたのは、他大学が E-learning システムを導入するようになってからどのような問題が発生しているのか、どのような効果が見られるのかに関わる資料であった。

萌芽期には、各大学が助成金制度の支援の下、IT 環境を充実させることにばかり注意を向ける傾向が見られた。何はともあれ、学内に一台でも多くの PC を設置しようとする動きは、伝統的な英語教育の実践者たちにとって、何か心のないものに教室が占領されていくかのように映ったことであろう。

発展期に入ると、整備が進んだ IT 環境の利用が目立ち始め、PC の教育効果の可能性が追求されるようになる。この頃には、英語教育に与えるマルチメディアの効果が認められるようになり、CALL（Computer Assisted Language Learning）という言葉が誕生する。利用者数が増えればそのニーズに対応するソフトウェアの開発が進むことになり、E-learning の歴史は、その後、急速に充実期へと向かう。大学が企業主導で開発された技能種類別ソフトウェアや資格試験対応ソフトウェアを盲目的に導入してしまった場合、現場の教員は教育の

質的転換を傍観する以外に何もできなかった時代である。

現在、教育システムとしての E-learning は、学習者を個人として設定するオンデマンド型と、一斉授業を支援するタイプとに分岐し始めている。教材の需要が二極化することになれば、現場の教員はどちらかのタイプを授業用に選択することを余儀なくされるであろう。しかし、それまでに独自の教育方針を磐石なものにしておかなければ、システムが人件費の削減にしか働きかけなくなる日を迎えることになってしまう。

3. 「嘉悦の英語」を支える E-learning 教材

転換期を迎えた E-learning のシステムであるが、それを導入し、実際にそれを運用する段階に至ったとしても、教材の内容に対する不満から E-learning の価値や、その潜在的な可能性が否定されてしまう恐れがある。それならば、独自の教育機関が求めるものを開発する以外に方法はない。本学ではどのような英語教育教材が必要なのであろうか。

第一に考えなければならないのは、教員が教育する内容に関する相当レベルの知識を備えているということである。単純化すると、知らないことは教えられないのだから、授業には教員が研究した「理論に支えられた英語教育教材」が用いられるべきである。第二には、大学生に「文化・言語・コミュニケーションに関わる情報が提供できる英語教育教材」を提供し、自国の文化・言語・コミュニケーションシステムと比較させることが望ましいと考える。なぜなら、学生は比較・対照を通じて何かを追求することから、専門的な知識を得ることが多いからである。最後に、しかし、最重要なものとして、「学生の言語運用能力を向上させることができる英語教育教材」が必要である。これは、単純に客観テストの点数を上げるための教材という意味ではない。英語を学習しながら、専門的な知識を獲得することができる教材という意味である。

E-learning にさまざまな利用法が見出されると、その定義も「遠隔地授業を実施するためのシステム」や「企業が人件費削減に求めた新任研修システム」から、「双方向性を備え、学習者の学習履歴が自動的に管理できるもの」にまで拡張された。今後は、このシステムを利用する各機関が用語を統一し、内容の充実と共有、洗練がくり返されてゆくことになる。その段階に到達すると、教育機関である大学は、学外審査の基準として、「独自の教育システム」や「デジタルコンテンツの質的・量的高さ」が測定されるようになるであろう。この拙い聴覚教材の断片が、その日までに準備が必要であることを認識する助けとなれば幸いである。

こうした取り組みに理解を示し、2005年度特別研究費の支給を承認してくださった嘉悦学園に対し、心より感謝したいと思う。

0. オリエンテーション

これから皆さんは、大学生として英語を学習してゆくことになります。そのためには、一日も早く自分が大学生であるということを自覚しなければなりません。この意識改革に必要なのは、授業が始まるまでに、「自分は社会に何を求められているのか」という問題を自発的に設定して、そこに自分なりの答えを用意しておくことだと思います。

大学は、専門的な知識だけではなく、皆さんが豊かな教養まで身につけて卒業してゆくことを期待しています。毎回の授業はその過程を支援することを第一の目的としているのですから、皆さんはそれをよく理解したうえで、大学の授業に臨むことが求められます。

0-1. 大学生に求められる教養

大学が皆さんに求めている教養とは、どうすれば身につくものなのでしょうか。また、何を、どれだけ知っていれば、大学生としての教養が身についたと言えるのでしょうか。こうした疑問を抱くことはとても大切なのですが、そこに答えを導き出すのは簡単なことではありません。なぜなら、教養という言葉にはさまざまな捉え方があり、安易に定義づけてしまうと、その言葉のもつ豊かな意味を狭めてしまうことになるからです。その一方で、教養という言葉の意味を曖昧にしたままでは、高校生が大学の授業を受けることになってしまいます。当面の目標を設定するためにここで3つの提案をしますから、それらを利用して、授業を通じて大学が皆さんに伝えようとしているものを解き明かしてください。

<提案1：言葉をよく観察する>

皆さんの周囲にある言葉をよく観察すると、実際に用いられている言葉がデータとして集まります。そのデータをもとにすると、言葉の特性や類型というものを追求することが可能になります。例えば、1つの状況を言い表すのに複数の異なる表現形式が可能な場合には、それぞれの表現形式の間にある違いだけではなく、そこで共有されている意味（或いは、価値）を説明することが必要となります。その手段として、言葉を使う人間を対象とした学問（例えば、生物学や心理学など）に関心を持つと、とても興味深い成果が得られることでしょう。また、その言葉が使われた場面（環境）に着目することにより、言葉を文化や社会を反映する鏡のようなものとして捉えるという方法があります。海外の文化や社会に関心を寄せることによって、日本の文化や社会との比較が可能になります。この方法なら、自分自身の視野を広げるとともに、自己（アイデンティティ）を確立することにも役立つでしょう。更に、言葉を用いた芸術（即ち、文学作品）に見られる豊かな表現に触れることを通じて、言葉の歴史的変化や、ある作家が好んで用いた文体（或いは、表現上の傾向）というものを浮き彫りにすることができます。皆さんが言葉に対してどのようなアプローチを選択するにしても、言葉をよく観察して、それを科学的に捉えてゆくことが必要となります。

科学的な研究方法とは、一定量の情報から仮説を導き出し、理論に支えられた実験のモデ

ルを用いてその情報を客観的に分析することから始まります。分析の結果が満足のゆくものであれば、それも1つの成果となるでしょう。しかし、研究を進めてゆくためには情報量を増やし、実験のモデルを洗練してゆかなければなりません。その過程において、専門的な知識が要求されることになります。どのような専門分野に進むにしても、皆さんは科学的な手順に従って、客観的に（時には、批判的に）ものごとを判断してゆくことが求められるのです。

<提案2：会話から対話へ>

同じ言葉を使って生活している人間同士であっても、日常的に誤解は生じるものです。ましてや英語を母国語としている人とのコミュニケーションともなれば、お互いの気持ちどころか、今はまだ言葉そのものが通じないことの方が多いかも知れません。それでも、現代社会を生きる皆さんは、国際社会における相互理解の実現を目指し、お互いに言葉の壁を乗り越えてゆく努力をし続けなければなりません。

その具体的な訓練の方法として、大学は皆さんに会話から対話への移行を推奨します。どちらも同じもののように思えますが、両者の間には大きな違いがあります。会話というものが、すでに一定程度の共通理解をもった者の間で成立する情報交換であるのに対して、対話は、お互いに（未だ）わかり合えてないことを前提として、相互の協力、協調、調和（時に、妥協）の上に成立するものです。このことをよく理解するために、もともと分かり合えている集団の中に、未だわかり合えていない者が加入してきたことを想像してください。集団の力が強ければそこには排除という力が作用して、後から加わった者だけが自らを環境に合わせる努力を強いられることになります。逆に、新しく加わった勢力が強ければ、既存の集団に変化が要求されることになるでしょう。しかし、対話を心がける環境では、既存の集団が新しい要素（構成員）を一度取り込み、相互理解のために集団全体が変化してゆくことになります。相互の努力に支えられている環境の整備は、21世紀型社会を実現させる第1歩なのです。

大学は皆さんに、自分とは違うものごとの捉え方をする人を受け入れ、他者をいたわる心を養う場を提供しています。誰とでも公平な立場でわかり合おうとする柔軟な姿勢は、お互いに考え方が違うことを当然とするゆとりを生み、決して自分の考えを相手に押しつけようとしないうる寛容さを育むものです。このように、大学は社会性豊かな心を養う環境を提供して、そこに皆さんの教養が根づいてゆくことを願っています。

<提案3：問題発見・問題解決能力の養成>

言葉をよく観察して、それを情報として集めたとしても、また、対話の必要性を十分に認識し、相互理解を深める気持ちがあったとしても、そこにどのような問題があるのかを発見する力がなければ意味がありません。更に、問題を発見できたとしても、それを解決する能

力がなければ何も創造することができません。皆さんは、日常の中で起こっていること（即ち、事象や現象と呼ばれるもの）に対して常に意識を働かせ、未解決のまま放置されている問題を発掘してゆくように心がけなければなりません。そのためには、特定の分野だけに縛られることの無い、幅広い知識を吸収し続けてゆくことが求められます。

専門分野に関する知識を獲得するということは、大学生にとって重要な勤めです。その知識が豊富であるということは、特定範囲のみに関して言えば、より多くの分析モデルを手に入れることに通じるからです。しかし、自ら発見した問題を解決する段階になると、異分野で採用されているモデル（或いは、解決方法）が有効な場合もあります。例えば、考古学や数学の分野で採用されている分析方法で言葉を捉えた研究者がいるというのは、言語研究の世界では有名な話です。いかなる分野においても、こうした人々が抜きん出ているのは、データから問題を発見する洞察力と、発見した問題を解決しようとする積極性とのバランスが取れていたことに加えて、目的を果たすためにはいかなる方法も活用しようとする貪欲な姿勢を貫き通していたからだとされています。こうしたバランス感覚と問題解決の能力は、皆さんのたゆまぬ努力の上に養われるものです。初心を忘れずに、継続を力と信じて、最後まで努力し続けてください。

3つのヒントから、いわゆる蘊蓄や雑学と呼ばれる点状の情報と、大学生に求められる教養との違いがわかりましたか。無作為に集められた個々の知識というものは、それほど役立つものにはなり得ません。また、得意な（或いは、特定の）分野に偏っている知識では、理解の範囲が制限されてしまう恐れがあります。しかし、幅広い知識を獲得して、個々の知識を結びつける力を養えば、どこからでも必要な情報へたどり着く可能性が発生しますから、ものごとをより広く、より深く理解するための方向性につながります。換言すると、大学生は知識を貪欲に獲得することに加え、それらをネットワークとして形成する（即ち、体系化する）能力が求められているのです。以上のことから、大学が皆さんに求めている教養とは、幅広い知識に支えられた、点在する情報を関連づけることのできる上位の概念（或いは、メタ知識）であると言うことができそうです。

0-2. 導入授業の構成

次の章では、授業の導入として、言葉に関する4つの情報を提供します。その第1は、この教材が言葉をどのように位置づけているのか、更に、その意味はどのように扱われているのかということの説明です。伝統的な言葉の研究では、実際に使用されている言葉をデータとして集め、よく観察し、そこにはどのような特性が内在しているのかを探求するという方法が採用されていました。言葉は自立した（即ち、閉じた）記号の体系であると見なされ、その周辺をなす領域は研究対象からは除外視されていたのです。言葉の意味を扱う場合にも、統語上の法則（或いは、文法規則）を記述することでたどり着ける範囲のものに限られ

ていたので、言葉の形式から判断できないものは何か特別なもの（例えば、「神話的な意味」であるとか、「文学的な表現」など）として扱われていました。

言葉の研究が進むと、コミュニケーションの成立に関わるすべてをその対象として扱うことで、その意味を捉えることが必要であるという主張が目立つようになります。この発想により、言葉というものは人間が主体的に周辺を認知する（即ち、意味づける）媒体として機能するものであるという考え方が導き出され、言葉の意味もその形式に依存して伝達されるものだけではなく、人間という高度に進化した生命体が一生のうちに経験するすべてのものであるという捉え方を可能にしました。言葉の研究対象を人間の自然な振る舞いにまで拡張させた結果、人間は言葉を交わすことで情報交換を成立させているだけではなく、言葉によって未知のものを概念化して、その意味を分節しながら拡張させて、更に発話として形式化しているということまでわかってきました。こうしたパラダイム（即ち、理論的な枠組み）の転換によって、言葉は人間が進化の過程で獲得した認知能力の根幹を成すものであり、この能力が人間を他の生命体と区別するものであると考えられるようになったのです。この教材は、こうした認知の視点で言葉と意味の関係を捉えてゆきます。

第2の情報として、言葉の意味と強く結びついている形式について説明します。ここで言う形式は、言葉を記号の体系として扱う伝統的な視点を受け継いだ捉え方をしています。しかし、この教材は個々の記号を構成する形式と意味との関係を恣意的なものとしてではなく、言葉の主体的な使用者（即ち、人間）に動機づけられたものとして扱います。そうすることにより、それぞれの形式（ここでは、記号）がどのような意味を表しているのか、ある意味を表すためにはどのような形式が好まれる傾向にあるのかという問題が、文化の記号論という視点から捉えることができると考えられるからです。この方法で言葉を捉え直すと、言葉の研究が発展段階にある時代に、文化人類学という学問分野で脚光を浴びた「サピア・ウォーフの仮説」が今に通じるものであるということが実感できるでしょう。

この仮説によると、世界中にある言葉というものは、日常生活の中でそれらが使われている文化圏に特有のものの捉え方に影響されて成立しているのだそうです。この仮説が正しいということを前提とすれば、個々の言葉の間に優劣をつけようとするには意味がないということがわかります。また、外国語の学習には、学習者自身がその対象となる言葉を成立させた文化と自国の文化とを比較することの意義を見出すことができることでしょう。そして、言葉はある文化を育んだ特定の地域で生活する人間の思考法（或いは、その傾向）によって形成される一方で、人間はその言葉によって文化を形成しているということがわかってきます。これはまさしく、人間の認知能力が言葉に支えられていると同時に、その能力に動機づけられて言葉の構造が作り上げられてゆくという考え方に通じるものです。

第3の情報は、英語を学習するということの意義を見直す機会を提供することを目的としています。皆さんはこれまで、外国語としての英語を学習するというのをどのように考えてきましたか。或いは、何を、どれだけ学習することを目標として設定してきたのでしょ

うか。恐らく、ほとんどの人は、すでに決められている時間割の中で英語を学習してきたため、事前にそのゴールを設定するという経験が無いのではありませんか。しかし、私たちが何かを達成しようとするときには目標を設定し、その実現までのスケジュールをたてるはずです。英語を学習するうえでも同じで、自分の到達すべき目標がなければ、学習計画がたてられないのです。ゴールの設定とそこに至るまでの計画には、自分が進むべき道を繰り返し選択することが求められます。この選択を通じて、大学は皆さんが自立する心を育むことを期待しています。

最後に、相手に正確に通じる英語を話したり書いたりする場合に必要な、英文法の基本について説明します。皆さんは、英語を学習するのにその主語と動詞が作れなければ何も始まらないということを知っています。しかし、その主語がどのような要素から成るものなのかとたずねられると、簡単には答えられなくなってしまいます。同様に、動詞が現在を中心に過去や未来を表すことはわかっている、そこに現在とどの程度の係わりを持たせられるかとたずねられると、やはり困ってしまいます。こうした問題を正確に解決する方法として、英文法の基礎は確実なものにしておく必要があります。

この説明部分は、この教材を通じて皆さんに学習してもらいたいことの全体像を示し、今後の学習計画をたてるのにも役立つものです。それはちょうど、ジグソーパズルの箱に描かれた絵をよく見て、これから1つ1つのチップをどこにはめ込んでゆこうかと考える時間とよく似ています。その説明を正しく理解することによって、皆さんの実力がどの程度まで伸びるのかが決まると言っても過言ではありません。どれだけ時間をかけても、このとても大切な部分をよく理解して欲しいと思います。

その先にある問題部分は、以上の解説部分から発展したものばかりです。皆さんが正確に理解してしまえば、とても楽な気持ちで進むことができるようにプログラムされています。問題につまずいたときには、この解説部分に戻ることを勧めます。

0-3. 各 Part の構成

Part 1は「名詞句の構造（第2章）」と「述語動詞の構造（第3章）」からなり、後続の問題部分を理解するうえで役立つ情報を提供しています。どちらの章も、英文法を言葉の構造という視点で捉えることにより、これまでの授業形式に近い形で文法の復習ができるように構成されています。文構成要素の内部構造（ここでは、「主語」と「述語動詞」）がどのような要素の配列からなるのかを見直すことにより、英文法の基礎を固めてください。これまで英文法を体系的に学習した経験のない人でも、この方法でこれまでの内容を復習することにより、自分の伝えたいことが正しい英文として完成してゆくプロセスを実感することでしょう。

この節を通じて皆さんに確認してもらいたいのは、ある目的を果たすために求められる最良の表現形式というものは、いくつかの可能性のある要素（厳密には、連合関係にある選

扱項)から同時に必要な選択を行った結果のあらわれであるという事実です。この言葉の捉え方が反映しているものは、言葉の構造が特定の目的を果たすために存在しているのではなく、ある特定の目的を果たそうとする人間が、その目的に応じて言葉の形式を規定するという捉え方です。このように、言葉の使用を社会活動の1つとみなし、実生活における場面どのように働くかということに関心を寄せる捉え方を、(言語の)機能主義と言います。

Part 2では、春学期と秋学期の授業という、より実践的な学習計画の中で英文法を確認してゆきます。「春学期授業(第4章)」と「秋学期授業(第5章)」は、それぞれ12回の授業という形態で組み立てられています。どちらの章でも、私たち人間の身体的な特徴が言葉に多大な影響を及ぼしているということに気づくことでしょう。例えば、文法規則がどれだけ長い名詞句を作り上げることを許したとしても、人間の肺には供給可能な酸素量(一般的には、肺活量)が決められていますから、常識的に、それを大幅に超えた酸素を必要とする(即ち、物理的に異常に長い)文を作り出すことはありません。ある文が発音するのに困難を伴うほど長い場合、私たちはその文に何か特殊な意味(或いは、意図)を読み取ることになるでしょう。

人間の身体的な特徴には、このほか、物理的な非対称性というものが挙げられています。その結果、人間は時間や空間を、上下、前後、左右、遠近、大小などという方法で知覚し、そこには別な意味を読み取ってゆきます。この現象は特定の言葉を用いる地域や文化圏に限られていないことから、私たちはそこに言葉の普遍性を見て取ることになります。例えば、高い場所(位置)にあるものに価値を見出し、近くのものには親しみを感じます。また、前に起こったことは遠ざかるのに対して、これから起こることは近づいてくるように捉えているということがわかります。こうした現象を、英文法の復習から学んでください。

どの授業も、皆さんが自分のペースで先に進むことを想定して作られています。解説を聴けば理解できてしまう人は、不注意による間違いを犯さないように気をつけてください。説明部分を何度も繰り返し聴かないと理解できない人は、時間をかけることで実力をつけましょう。説明を聴いただけでは理解できない人は、途中でいやになってしまう前に相談してください。大学の教員は、喜んで皆さんのお手伝いをします。

誰にでも、思うように問題が解けずに、くじけそうになる時があるものです。そうした時には必ずこのページに戻ってきて、皆さんが自分の目の前にある問題を解決しなければならない理由を、もう一度思い出してください。

それでは、導入授業を始めます。解説される内容は、皆さんがこれまで学んできたものばかりですが、今までとは異なるアプローチで紹介されます。初めはとまどうこともあるでしょうが、それは誰もが感じていることです。すべての復習が終わったら、自分で計画したスケジュールに沿って、皆さんが必要と感じたものから学習してください。

1. 導入授業：言葉の理論的な解説

ここでは、皆さんがこの教材を使う上で必要と思われる、最低限の理論的な解説をします。この教材は、言葉を専門的に学ぼうとしている学生や、すでに言葉に関するある程度の知識を持っている人を前提としてはいません。ですから、ここから始まる内容は、大学生が英語を学ぶ上で、不可欠な情報として受け止めてください。

(1) 認知の傾向

<授業の前に>

サッカーの試合を観ていると、自分が応援しているチームが決勝のゴールを決めました。あなたは応援しているチームがゴールを決めたので、「やったー」と叫びます。ところが、同じ時間に、同じ試合を、同じ場所で観戦しているのに、あなたとは違う気持ちになっている人がいます。なぜだと思いませんか。

私たちが日常的に経験するさまざまな事態は、感覚器官（主に、視覚や聴覚）を通じて知覚され、ある種の情報に変換されて脳に伝わります。伝達された情報は一定期間脳内に蓄積され、最新の情報に対する判断の基準として再構築を繰り返してゆきます。こうして私たちの価値（意味）判断基準というものは、過去の経験を基盤として、無意識のうちに更新されているのです。複数の人間が同時に同一の事態を経験した場合には、それが個々の脳には別な情報として伝達されることになります。その結果、その経験は別の言葉で言い表されるということが起こります。

また、時間の経過や空間の移動を伴うと、私たちは同じもの（或いは、繰り返し経験すること）から異なる意味を読み取ることがあります。例えば、同じ本を何度か読むと、その度に新しい発見をします。見慣れた風景や景色も、季節の移り変わりとともに、その印象が違うものとして感じられるということが起こります。旅先で買った土産物が、いざ誰かに贈ろうとした途端、とても陳腐なものに思えてわたせなくなってしまうという経験は、誰にでもあることでしょう。こうした現象は、頻繁に繰り返される経験を通じて、私たちのものの捉え方に長い時間をかけて深く浸透しています。そのため、視点を変えて考えないと気づくことさえ困難なものになっています。

ここで更に注目すべきことは、同一の経験を通じて得た情報が、いつでも、誰にでも同じ意味として捉えられているわけではないということと、同一の経験が違う情報として脳に伝えられた場合には、異なる表現（形式）で言い表されるということが起こったとしても、それを受ける側はそれらを同じ（或いは、かなり似ている）こととして処理することがあり、それでも日常生活に支障をきたさないという点にあります。これは恐らく、私たち人間が進化の過程において認知の傾向というものを脳内に形成してきたからであると考えられます。

認知の傾向に基づいて日常の情報交換を（即ち、言葉を用いたコミュニケーションを）捉え直してみると、話し手が同一の事態に対して異なる表現を用いた時、聞き手としての私たちは、そこに「異なる意味を探し求めよう」とする傾向と、「同じ（ような）ことなら、まとめてしまおう」とする傾向とを共存させていることに気づかされます。

これまで観てきたことから、私たちが経験を通じて何かを理解するまでの一連の過程は、次のように一般化することができるでしょう。

- ：経験的な基盤を背景とした判断の基準が異なれば、同一の事態でも別の情報として捉えられることがある
- ：別の情報として捉えられた事態は、それぞれに異なる表現形式が要請される
- ：異なる複数の表現形式から、人間は同一の事態が別のこととして捉えられているのか、それぞれの表現が違うことを言い表そうとしているのかを理解しようと働きかける
- ：この一連の活動を「認知活動」（或いは、「意味づけの営み」）という

立場や視点によっても、私たちは普段から言葉を使い分けています。そして、この使い分けによっても、同一の事態は異なる言語表現を要請することがあるのです。このことをよく理解するために、あなたがサッカーの試合をスタンドで観戦している場面を想定してみましょう。たった今、あなたが応援しているチームが決勝のゴールを決めたとします。あなたは、応援しているチームがゴールを決めるのを見て、歓び、「やったー」と叫ぶことでしょう。ところが、同じ時間に同じ試合を同じスタンドの反対側で観戦していた人たちには、そのゴールがどのように捉えられると思いますか。答えはもうおわかりのように、自分たちの応援するチームがゴールを決められたことを目の当たりにして、くやしがり、「やられた」と意気消沈していることでしょう。これは、同じ選手が蹴ったボールが同じゴールの中に入ったという経験を共有したにもかかわらず、お互いの視点が異なるため、あなたと相手チームのサポーターは、そのゴールを違う情報として捉えたために起こった現象なのです。

(2) 形式と意味

<授業の前に>

質問：次の3組の表現には、それぞれどのような違いがあるでしょうか

- ・100万円しか持っていない／100万円も持っている
- ・太郎は花子に本をあげた／花子は太郎から本をもらった
- ・（天気予報によると）明日は雨になる／（このぶんど）明日は雨になる

経験が個人のものごとの捉え方に影響を及ぼしているということと、捉えられたものが異なれば表現形式が変わるということがわかりました。以上を踏まえて、形式が異なれば意味が異なるという考え方について説明します。

今あなたが歩いている道は、その両側が塀で囲まれています。やがて右手の塀は途絶え、その道は直進するか、右に折れるしかなくなりました。その道を右に曲がる時、あなたは「角を曲がる」ことになります。同じ頃、その塀の向こう側には庭の掃除をしている人がいます。あなたが曲がろうとしている場所にその人が近づくと、その人は「庭の隅を掃く」ことになります。では、なぜほぼ同一の場所があなたには「角」であり、掃除中の人には「隅」なのでしょう。ここで問題となるのは、2つの表現形式が示す場所が物理的に同じでも、それを捉える人にとっての「見え（方）」が異なっているという点です。この違いが異なる表現形式を要請したために、あなたと庭の中にいる人とでは違う語を用いてそれぞれの場所を言い表す必要があったのです。

同様のことが「行く」と「来る」との間にも起こりますので、それを別な例で説明してみます。あなたが居る場所に誰かが近づいてくることを想像してください。あなたの目に映る人はだんだん近づいてきますから、あなたは「…が来る」と言い表します。しかし、相手の人からするとあなたに近づいてゆくことになりますから、「…のところへ行く」と言い表すことになります。次に、あなたと相手の人が今居る場所から離れた場所について話す時、どのようなことが起こるのかを考えてみましょう。あなたは相手に「…に行くのだけれど、あなたも来る（来ますか）」とたずねられ、「私も行く（行きます）」と答えます。しかし、あなたは決して「私も来る（来ます）」とは言いません。また、あなたと相手の人が、今居る場所から離れた所に別の誰かが行くかどうかについて話していることを想像してください。あなたが相手に「…も行くのかな」とたずねられたら、「たぶん行くよ」と答える場合もあれば「たぶん来るよ」と答える場合もあります。「…も来るのかな」とたずねられると「たぶん来るよ」と答える場合もあれば、「たぶん行くよ」と答える場合もあります。

こうした表現の違いが起きる現象は、一般的に「人称制限」という文法規則に基づいて説明されます。日本語では、述語動詞の振る舞い方が人称によって一様ではなく、それが表現の上で制約となって現れてくることが観察できたでしょうか。下の表1の結果から、話し手が実際に会話を成立させている場所や、会話の内容が示す目的地までの移動をどの程度まで

表1. 日本語の「行く」と「来る」の人称制限

	話者の居場所と対象となる場所		話者が対象となる場所へ移動する意図	
	同じ	違う	有	無
1人称	来る	行く	行く	*行く
2人称	来る	行く・来る	行く・来る	行く
3人称	来る	行く・来る	行く・来る	行く

*【話者に異動する意図が無い】場合は、行かないが一般的

含意しているかによって、日本語の「行く」と「来る」との使い分けが揺らいでいるということを整理し、その使い分けを比較しましょう。

会話が交わされている場所における「行く」と「来る」との振る舞いはどの人称もすべてが「来る」となり、会話が交わされている場所と話題となる場所とが異なる場合においては2人称と3人称に揺らぎが現れています。そこから、話し手自身の移動が含意されている場合に限り、2人称と3人称には揺らぎが現れるという見方ができます。この現象には、話し手が既に自分を目的地に移動させていることを想定していることや、これから自分が話し手とともに目的地まで移動することを示唆しているということが見て取れます。また、話し手が聞き手の移動を前提として会話を成立させている場合にも、同様の揺らぎが見て取れます。上の結果から、日本語は、話し手を中心に「行く」と「来る」という語の意味（及び、その使用法）を規定している言葉であるということが言えそうです。

このほかにも、通常の疑問文・否定の疑問文・否定文・命令文という文の構造に影響を及ぼす表現が用いられた場合や、提案・勧誘・禁止が含意された場合には、違った結果が現れる可能性も否定できません。

<授業の後で>

課題：英語では、話し手と聞き手とが対面でないほど離れている場合（例えば、話し手が1階にいて、聞き手が2階にいるような場合）、相手を Come here と呼ぶのに対し、I'm coming と応えます。このことから、英語の性質を考えてみましょう。

(3) 目標の設定と学習計画

言葉を用いたコミュニケーションの成立過程には、ものごとの捉え方や表現形式、その会話が交わされている場面やそこに関与する人間が深く関わっていると言われています。大学生が外国語としての英語を学習するには、その言葉が成立した文化的・社会的背景に関心を寄せると同時に、母国語である日本語と英語との間にある構造上の違いにも注意を払うことが必要となります。実際に言葉が使用される場面に関わる要因を総合的に捉えることにより、コミュニケーションをより効果的に成立させる方法を身につけ、どのようなことが英語を学習する過程で障害となっているのかを予測しておきましょう。

① コミュニケーションの成立条件

コミュニケーションとは言葉を用いた情報交換全般のことで、通常は文の単位を超えた談話レベルで理解されるものです。あるコミュニケーションが話し言葉の場合には会話が、書き言葉の場合はテキストが分析の対象となり、一連の情報構造から社会的な機能を読み取り、それが特定の社会における妥当な方法であるか、その目的はどの程度まで果たされているのか、情報構造は論理的であるかなどが調査されることになります。このように、実際の

場面で使用されている言葉の研究は、語用論という分野で行われています。

(i) 関与者（話し手と聞き手）

言葉の使用に関わる最も重要な要素は、その場で関与する人間です。一般的に、言葉は聞き手と話しての間で交わされる情報のやり取りですから、そこで情報を発信する側と、その受け手という関係が成立しています。情報が交換される過程において、両者の役割は頻繁に交代を繰り返し、それに伴って1人称と2人称とが入れ替わります。両者の間には社会的な関係がすでに成立していることが多く、その上下、遠近、優劣などの関係によって、表現や語彙の選択に変化が生じることがあります。

コミュニケーションは関与者相互の協調のうえに成立するものなので、その目的を達成するのに関係のない内容や情報の過不足は好ましいものではありません。しかも、実際の場面で交換される情報が求める結果（即ち、社会的機能）は、必ずしもその形式が伝えるもの（即ち、狭義の「意味」）と一致しているわけではありません。語用論では、関与者の発話をより正確に知るうえで、少なくとも3通りの側面を分類する必要を認めています。それぞれは、発話行為（交換される情報の記号形式が伝える意味）、発話内行為（話し手の意図する意味）、発話媒介行為（聞き手が読み取る意味）と呼ばれています。

(ii) 場面と内容

コミュニケーション成立の判断基準として、それがどのような場面で起こり、何を伝達したのかはとても重要なことです。なぜなら、この両者が同時に働きかけることによって、そのコミュニケーションが特定の社会において正しく機能しているかどうか判断されるからです。一般的に、TPO（Time, Place, Occasionの頭文字）として知られている会話の成立条件も、場面と発話内容とを同時に意識することを要請する社会的な制約（或いは、規範）として認識することができます。このように、場面と発話内容はお互いにお互いを規定し合うものですから、どちらか一方でも社会が認める範囲を逸脱した場合には、そのコミュニケーションに別の意味（即ち、社会的な機能）が読み取られることになります。

(iii) 文化のコードと言葉のコード

私たちの会話というものは、場面とその発話内容を同時に意識することを前提とした、さまざまな相手との情報交換です。しかし、そうした働きかけはあまりにも日常的な習慣となり、あえて意識しないと働きかけていることに気づくこともありません。このように、目に見えないほど生活に浸透している社会的な規範を、言葉の研究分野では文化のコードと呼びます。どの言葉にも文化のコードは浸透しているのですが、それを最もわかり易く意識する機会を提供するのが外国語の学習です。

外国語の学習をするには、その対象となる言葉の情報交換システム（即ち、仕組み）を知る必要があります。実際の場面で情報が伝達する経路というものに関して、どの言葉もほぼ同じのものであるというのが一般的な考え方です。しかし、それぞれの言葉は意味と形式とを異なる組み合わせで記号化していますから、言葉のコードが異なっていることになります。

そのため、母国語とは異なる音声組織や語彙の体系、慣用句から修辭的表現にいたるまで、さまざまな違いを比較対照させなければなりません。そうしていくうちに、皆さんは外国語に特有の表現形式や、母国語とは異なる意味の捉え方に触れる機会が多くなってゆきます。英語に関して言えば、それは天候や時間を表すのにも主語を必要とし、どのような知覚対象でも数を意識するのに、兄弟を言い表すのには自分との年齢差を明示せず、人称代名詞のバリエーションが少ない。子音の数が非常に多いのに、同音異義語や類義語も多い言葉です。このような特徴をもつ英語の成立過程には、それを用いて生活している人間の築き上げてきた文化が反映しているのです。

(iv) 話し言葉と書き言葉

私たちは、実際のコミュニケーションの場面で、話し言葉と書き言葉の使い分けをしています。単純化すると、会話を交わす相手との位置関係が対面で、同時であれば話し言葉、その相手が必ずしも対面ではなく、実際の発話と文字情報の作成との間に時間的な違いがあれば書き言葉を用いるということになります。しかし、情報の受け手（聞き手や読み手）との関係が異なる場合や、会話を通じて社会的な立場を設定している過程において、この限りではありません。

このほか、話し言葉には自発的な会話の要素が強く、社会的な機能が達成できなくてもそれを修復する機会があるのに対して、書き言葉には形式の重視や、客観的な視点が要求されます。これもまた、文化のコードの問題に影響を受けていると言えるでしょう。

② 学習計画

以上を踏まえて、大学生が外国語を学習するためには、少なくとも3段階の設定をする必要があります。その第1は高校までに学習した内容の復習であり、それは大学生としてこれから外国語を学習する権利を得るためのレベルです。「実用英語検定試験」の2級がこのレベルであると言われています。第2のレベルは、社会人としてコミュニケーション成立に積極的に働きかける準備をする段階です。特に、大学という小さな社会の中で要求される人間関係の構築、場面と発話内容の意識、その目的達成までのシミュレーションが外国語でできることはとても重要なことです。「TOEFL」の500点以上がこのレベルと考えられます。第3のレベルは、皆さんの専門に関する知識を外国語で学び取り、それを外国語で表現できる段階です。このレベルは海外留学がすぐにでも始められるレベルで、学術論文が作成できる準備の段階です。かなり高度な専門知識と語学力が求められます。

これから大学で過ごす4年間に、皆さんはどこまで外国語の能力を高めようとしているのでしょうか。この時期に明確な目的を設定し、それを段階的に達成してゆく計画をたて、日常の習慣にしてください。

(4) 英文法の基礎

言葉によるコミュニケーションを理解するには、人間がどのように周囲を分割し（即ち、言葉によるカテゴリー化を行い）、それはどのように表現されるのか（即ち、文法規則という統語配列上のルールに当てはめられてゆくのか）という問題とが関わってきます。この問題を、言語の研究方法与文法（統語規則）という言葉で説明します。

英語で書かれた文の意味を正しく理解するためには、元よりその文の構成要素に備わる意味だけではなく、その要素間の相互関係を明らかにすることが必要です。外国語として英語を学習している私たちは、この「書き言葉」を理解する一般的な手続きを、無意識のうちに「話し言葉」にも適用しています。そのこと自体が正しいのかどうかという問題はさておき、これまで無意識のうちに行われてきた外国語の学習方法を意識的に捉え直してみようという試みは、とても大切なことです。これまでよく考えたことが無いことに対して積極的に意識を働かせることで、私たちは英語を母国語としている人たちが意図している意味にどの程度まで近づいているのか、自ら判断できるようになると考えられるからです。

手始めに、普段、私たちがどのように英語の主語と述語動詞を理解しているのかを振り返ってみましょう。文の主語が名詞句でできている場合、その中心となる名詞のみならず、周辺をなす修飾部分との関係から名詞句全体の意味をたどります。中心となる名詞は人間なのかそれ以外なのか、修飾部分の位置は中心となる名詞の前か後か、修飾部分にはどのような性質が備わっているかという問題に取り組むことは、その名詞句全体の意味を理解するうえでとても重要なことです。

述語動詞には、時制と様相（時に、法）による影響から、語の形態変化と構成要素の統語配列が要請されます。時制は時間的な意味範囲の設定を行い、そこに3種類の形態変化が要請されますが、その変化のすべてが同程度に顕著なわけではありません。情報の受信者（聞き手）は、この3種類の形態変化を受けて、発信者（話し手）の視点や事実の程度を判断することになります。また、様相は述語動詞の構成要素に4種類の統語配列を要請し、それに伴う形態変化を求めます。この統語配列と形態変化は、話し手の微妙な意味の捉え方の違いを反映するとともに、そこに伝えられる情報量や複雑さの違いも表しています。

こうして明らかにされた主語と述語動詞の意味は、文全体のほとんどを占めています。しかし、文全体の意味をより正確に理解するためには、互いの関係を更に詳しく観察することが必要となります。例えば、その主語は自らの意図や責任を伴って述語動詞に備わる意味を実行しようとするものか、述語動詞の表す意味は典型的な意味なのか派生的なものなのか、主語と述語動詞の結びつきが論理的に弱い場合には何を表そうとしているのか、文中の副詞句は全体の意味にどのような影響を及ぼすものかという問題など、どれも文の意味を理解する上では大切なことばかりです。

最終的にはコミュニケーションの成立を目的として英語を学習するのですから、文法のレベルを超えた「談話レベル」にまで到達することが必要となります。しかし、この段階では

文法のレベルに学習の範囲をとどめて、主語となる名詞句と述語動詞をよく理解することに集中します。できるだけ易しい言葉で説明するように心がけますが、もしも途中でわからなくなったら少しだけ前に戻ってください。また、説明の途中であっても、すでに理解できていると判断したら、次の説明に進んでください。

PART 1. 主語と述語動詞の構造

2. 名詞句の構成要素

これまで見てきたように、本来であれば主語と述語動詞とを同時に整理して、文全体の意味にたどり着くことが必要です。しかし、ここでは名詞句に注目し、その構造と機能を復習することを通じて形式に備わった意味を探り出すという手順をとります。なぜなら、英語を学習する上で、名詞句はとても重要なものとなるからです。皆さんは高校で英語の名詞句は文法上の主語や目的語としての役割を担うということを既に習っていますから、それがどれほど大切なものかは理解できますね。

名詞句を形式面から整理していく過程において、一般的には文法項目として学習される品詞が関わってきます。名詞句の意味の中心的な役割を果たす名詞には、その性質を明示的に分類しておく必要があります。同時に、名詞句の修飾部分を構成している以下の品詞にはどれも形容詞の機能が備わっていますから、それぞれがどのような配列を要請するのか、その配列から私たちはどのような意味を読み取る傾向にあるのかを、順に確認してゆきましょう。

- ：形容詞／形容詞句
- ：現在分詞／過去分詞の形容詞的用法
- ：to 不定詞の形容詞的用法
- ：動名詞の形容詞的用法
- ：前置詞句の形容詞的用法
- ：関係代名詞節（形容詞節）
- ：名詞の形容詞的用法

この章では、形容詞と形容詞句が名詞を修飾することに加え、名称の異なる品詞のもつ形容詞としての機能を観察してゆきます。品詞の分類は、その形態的な特徴だけではなく、文中の役割（機能）に注目する必要がありますから、そこに潜む微妙な意味の変化に惑わされないように注意してください。

<ワンポイント>

文法項目として皆さんが学んできた形容詞というものは、名詞を修飾する働きをもっている語で、それ自体が飾り言葉と呼ばれるものです。ここでは、名詞の意味に情報を付加することによってその意味をより豊かなものにすることができるものは、文法項目として形容詞には分類されていなくても形容詞の機能を備えたもの（形容詞的用法）として扱います。

繰り返しになりますが、言葉というものは初めから文としての構造をもつものではなく、その多くは、私たち人間が自分の考えを表すため、必要に応じて要請している（つまり、動機づけられた）形式であるということを忘れずに覚えておきましょう。形式から意味をたどる作業とは、本来の言葉の成立過程に逆行しているということを踏まえた上で、この先の説明を聴いてください。

(1) 名詞句の基本構造

英語の名詞句は、以下の四つの構成要素の配列から成るものです。これらの構成要素がどの品詞のどのような配列によって名詞句を形成しているのか、順に観察しましょう。

- ：限定詞
- ：前置修飾部分
- ：意味の中心となる名詞
- ：後置修飾部分

名詞句の構造上の配列関係に従って名詞句の「意味の中心となる名詞」に着目すると、先頭には名詞句全体の性質を限定する要素が置かれ、その前後には修飾部分が配置されていることに気づきます。それを表したものが、下の表2です。

表2. 名詞句の基本構造と構成要素

基本構造	限定詞	前置修飾部分	意味の中心となる名詞	後置修飾部分
構成要素	a/an	形容詞	人（人間）	形容詞句
	the	形容詞句		現在分詞
	this/that	現在分詞		過去分詞
	these/those	過去分詞	物（物体・物質）	to 不定詞
	my/our			
	your/your			
	his/her	動名詞		前置詞句
	its/their			関係代名詞節
	every			
	some/any*			
	both**			
	such**	名詞	こと（ことがら）	

*印は、不定代名詞の数量詞用法として扱われる場合もある

**印は、限定詞に先行する場合もある

名詞句は、常にこれらの要素をすべて備えているわけではありません。例えば、意味の中心となる名詞が人間の場合、英語の話し手にはその人の名前を何度も繰り返さないという習慣があります。人称代名詞 (he, she など) で代用されることになります。こうした場合は、語が単独で文の要素 (例えば、文の主語) として機能しますが、元の意味が複数の語から成るために、名詞句として扱われることになります。また、抽象的なことがらを表す名詞 (抽象名詞) の場合、その語の属性 (即ち、意味を形成する要素) や構成要素の集合的な意味合いから、やはり名詞句としてみなされます。限定詞も修飾部分も伴わない複数形の名詞は、個々の名詞の集合体と考えることができますから、やはり名詞句として扱います。

修飾部分は、意味の中心となる名詞に先行するものと、後方から情報を付加するもの、更には、一定の法則に従ってどちらにも置かれるものとに分類されます。また、限定詞を名詞句の先頭に要請するかどうかは、文と文との意味的な結束関係によって決まることが多いので、文を超えた談話のレベルで重要な問題となります。こうしたことから、意味の中心となる名詞以外の構成要素は、どれも任意に要請されるものとして捉えることができます。

(2) 意味の中心となる名詞

名詞句の構造的・意味的な中心には必ず名詞が置かれて、その意味的な機能から、人間、物、ことがらに分類されています。また、意味の中心となる名詞は述語動詞との関連でもさまざまに分類されます。私たちは、名詞句を文の中心的な役割を果たす構成要素として認識するとともに、述語動詞との関連から更なる細分化を行うことで、その機能を正確に把握しておくことが必要となります。このことを下の表3で確認し、皆さんが知っている名詞がどこに分類されるかを確かめてみましょう。

表3. さまざまな名詞の分類法

分類の根拠	下位区分	具体例
可算性	数えられる (形態変化有り)	boy/boys, child/children
	数えられない (形態変化無し)	money, furniture, water
具体性	触れることができる	lumps, books, CDs
	触れることができない	electricity, reading, sound
輪郭の有無	形がある	car, pen, house
	形がない	vehicle, color, life
意思の有無	有る	human, animals, insects
	無い	weather, plants, keys
可動性の有無	動くことができる	cats, birds, stars
	動くことができない	trees, buildings, paper
性	男性	男性固有名詞
	中性	babies, infant, thing(s),
	女性	女性固有名詞, countries, ships

論理的に考えると、典型的な名詞とは、分類の根拠となる項目をすべて通過することができるものということになります。それは、人間の目で捉えることのできる輪郭をもっているために数えることが可能であり、自らの意思を持って移動ができ、触れることができるもの、つまり、人間にとっては「人間」が最も典型的な知覚の対象になります。これは、人間が自らを中心とした親密さの関係を認知の傾向として備えていることを反映しています。このことから、人間が生活の中で必要に迫られて言葉を作り上げてきたという事実を垣間見ることができます。

(3) 限定詞

意味の中心となる名詞の性質が、その名詞句全体の性質となります。しかし、いつでも名詞が名詞句の先頭に配置されているわけではありません。そこで英語は、名詞の性質をできるだけ早く聞き手に伝える必要から、冠詞 (a/an/the) や不定代名詞 (some/any) を限定詞として名詞句の先頭に配置することで、名詞句全体の性質を聞き手に伝えていると考えられます。

不定冠詞 (a/an) が可算名詞に対応するのに対して、定冠詞 (the) は加算名詞、不可算名詞の両者に対応しています。不定冠詞は「単一 (独) のもの」、「ある特定されていないもの」という意味で名詞の性質を明示しているのに対して、定冠詞は「唯一絶対のもの」、「特定されたもの」という意味で名詞の性質を明示しています。

不定代名詞も可算名詞、不可算名詞の両者に対応して、名詞の数や量を「いくつかの」、「いくらかの」という意味で明示しています。注意を要するものとして、肯定文における any が「いかなるものも」という包括的な意味を備えていることを確認しておきましょう。

(4) 修飾部分

修飾部分は意味の中心となる名詞の前後に配置され、その情報量を増やす役割を担っています。意味の中心となる名詞を修飾するさまざまな構成要素には、どれもその名称には関わりなく形容詞としての機能が備わっています。基本的には名詞の前か後ろのどちらか一方に置かれるのですが、どちらにも配置できる品詞の場合には、単独 (1 語) で名詞を修飾するものと、その他の情報とともに名詞を修飾するものとに分類されます。皆さんは補足的な情報が後方に置かれる英語の性質から、名詞句の意味を後ろから訳しあげるという作業をしたことがあると思います。あの作業は、意味の中心となる名詞が名詞句の最後方に置かれる日本語の話者にとって、英語で書かれた文を理解するために仕方がなく行ってきた構造上の置換操作だったのです。

英語の構造上、名詞句の最後尾に名詞が配置されると、それが更に後方から修飾されることが可能性になります。この性質から、理論上、無限に長い名詞句を作ることが可能になります。しかし、実際のコミュニケーションの場面において、発音上の制約や聞き手の負担を

軽減する目的から、容量の大きな情報伝達は起こりません。なぜなら、どうしても必要な場合、いくつかの句や節に分けて伝える方法があるからです。

皆さんが高校で学習した名詞句に加え、言葉の背景にある問題を少し織り混ぜた内容を説明してきました。ここまでの説明を聞いて「それほど難しくはない」と感じられたら、もう何も恐れるものなどありませんから、春学期授業の「Lesson 1：形容詞＋意味の中心となる名詞」に進んでください。授業は下の表4に従って構成されていますから、途中で理解できないと感じたら、この章に戻ってきてください。英語の学習は、その速さを競い合うものではありません。それぞれのペースに合わせて、着実に力をつけてゆきましょう。

表4. 春学期授業計画

Lesson 1	形容詞＋意味の中心となる名詞
Lesson 2	形容詞句＋意味の中心となる名詞
Lesson 3	名詞＋意味の中心となる形容詞句
Lesson 4	現在分詞の形容詞的用法＋意味の中心となる名詞
Lesson 5	意味の中心となる名詞＋現在分詞の形容詞的用法
Lesson 6	過去分詞の形容詞的用法＋意味の中心となる名詞
Lesson 7	意味の中心となる名詞＋過去分詞の形容詞的用法
Lesson 8	意味の中心となる名詞＋to不定詞の形容詞的用法
Lesson 9	動名詞の形容詞的用法＋意味の中心となる名詞
Lesson 10	意味の中心となる名詞＋前置詞句の形容詞的用法
Lesson 11	意味の中心となる名詞＋刑余施設としての関係代名詞節
Lesson 12	名詞の形容詞的用法＋意味の中心となる名詞

3. 述語動詞の構成要素

英文を理解するためには、主語と述語動詞とを同時に整理して、文全体の意味にたどり着く準備が必要です。しかし、今回は述語動詞のみに注目し、それを構造と機能の面から捉えることにより、形式に備わった意味を探り出すという手順をとります。述語動詞を形式面から整理していく過程においては、文法の範疇における「時制と様相」（時に、法）が関わってきます。この2つ（もしくは、3つ）のキーワードを組み合わせることによって、下の表5の構造を順に説明していきます。構造の異なる述語動詞にどのような意味の違いが反映しているのかを探求することで、意味の違いはどのような構造を要請するのかを調べましょう。

表5. 時制と様相の組み合わせ

: 単純現在	: 単純過去	: 単純未来
: 現在進行	: 過去進行	: 未来進行
: 現在完了	: 過去完了	: 未来完了
: 現在完了進行	: 過去完了進行	: 未来完了進行

これら十二通りの組み合わせが理解できたら、構造化された言葉（即ち、言語表現）を耳にした人間が、自然の振る舞いとしてどのような意味にたどり着く傾向にあるのかを観察してゆきましょう。言葉の観察というものは、常にコミュニケーションの成立を意識しながら行われるものです。話し手だけ、或いは、聞き手だけの立場から言葉を観察するのは正しい方法とは言えません。どちらか一方に偏らないように注意してください。

(1) 時制と様相

「時制と様相」という2つの文法範疇を組み合わせることによって、英語の述語動詞における形式と意味の関係を整理します。英語の時制とは、ある話し手が状況や事態を判断する時に用いる時間的な規準を表し、「現在、過去、未来」に分類されています。話し手が、ある状況においてどのように事態を捉えているのかを表すものを様相と言い、「単純、進行、完了、完了進行」に分類されています。ここに挙げた4つの様相は、その順序に従って、話し手から伝えられる情報量が増加していることが文構造に反映していることを観察してください。

時制と様相とをそれぞれ縦軸と横軸とに分けて表記すると、その組み合わせが12通りになります。それを表したものが下の表6です。時制と様相とを組み合わせた述語動詞の構造には、異なる意味（機能）が備わっています。これは、話し手が伝えようとする意味が異なる形式（構造）を要請していることを表しています。手始めに、分類された述語動詞から、どのような意味にたどり着くことができるかを観察してゆきましょう。よく観察ができれば共通部分を持つものを指摘し、どのような意味の違いが形式に反映しているかを推測してみよう。

表6. 時制と様相のマトリックス

時制 \ 様相	単 純	進 行	完 了	完了進行
現 在	単純現在 am/are/is do/does	現在進行 am/are/is + <u>ing</u>	現在完了 have/has + <u>ed</u>	現在完了進行 have/has been + <u>ing</u>
過 去	単純過去 was/were did/ <u>ed</u>	過去進行 was/were + <u>ing</u>	過去完了 had + <u>ed</u>	過去完了進行 had been + <u>ing</u>
未 来	単純未来 will be will do	未来進行 will be + <u>ing</u>	未来完了 will have + <u>ed</u>	未来完了進行 will have been + <u>ing</u>

* ed は一般動詞の過去形を、ed は一般動詞の過去分詞形を現す

繰り返しになりますが、言葉というものは初めから文としての構造をもつものではなく、その多くは、私たち人間が自分の考えを伝えるため、必要に応じて要請している（つまり、動機づけられた）形式であるということを忘れずに覚えておきましょう。形式から意味をたどる作業とは、本来の言葉の成立過程に逆行しているということを踏まえた上で、この先の説明を聴いてください。

(2) 三つの時制

時制の違いは述語動詞の形態変化によって明示されますが、よく観察してみると、その変化はすべての時制において同じ程度に顕著なものではありません。時制を正しく判別し、その形式から正確に意味を読み取るように心がけましょう。また、ある時制が他の時制と意味の上で重複することがありますので、注意が必要となります。文構造がいつも機能と対を成しているとは限らないということを、ここで確認しておきます。

① 現在時制

現在時制とは、ある会話に参与している人（々）が存在している時間のことから、話し手が話している内容を、聞き手が聞いている時点を指します。基本構文における述語動詞には直説法現在（いわゆる、原型不定詞と同形）が用いられるために、形式的な特徴というものを顕著に表してはいません。主語の人称と数によっては（例えば、三人称単数）その形態を変化させることが必要となりますが、それも特定の主語に特異性を与えているものとして理解することができるからです。

顕著な形態変化を要請しないことを理由に、現在時制には特徴が無いと決めつけるのは誤りです。とりわけ、単純相との組み合わせによって、宣言文のようにゆるぎない断定が加えられることがあるからです。また、時や条件を表す副詞節関係代名詞節限定用法に現れたときには述語動詞に達成度の低さが含意されるため、その曖昧さから未来の意味が含まれることになります。このような構文に現れた述語動詞の現在時制には、形態のゼロ変化が加えられていると捉えることが必要となるでしょう。

② 過去時制

事実の描写が言葉の重要な機能であるとしたら、現在時制に劣らず、過去時制は重要なものとなります。なぜなら、私たちが過去の経験を通じて得た情報には、述語動詞の意味内容が完結したことを示す痕跡が残されているからです。事実である程度を示すために、述語動詞には語形変化が要請されています。この過去時制の意味典型として歴史的事実が挙げられるのは、多くの人間を証人として正確な資料を元に語り継がれてきた事実であるということによるものです。

通常、過去時制は現在の状況やものの捉え方からは隔絶したものとして扱われます。なぜ

なら過去時制は、(今はどうあれ) 過去のある時点において起こった事実を伝えるものだからです。物語の語り口に過去時制が頻繁に用いられるのは、この事実の完結を聞き手(読み手)に暗示するためであると考えられます。ところが、過去時制が条件節(仮定法 If 節)に現れた場合、この事実である程度が急激に下がります。聞き手はそこに直説法の意味(反意)を見出し、仮定法の帰結の意味を理解してゆきます。事実を表すことをその典型としている過去時制が、述語動詞の意味を反転させることがあるということを覚えておきましょう。

③ 未来時制

私たちは、日常的に未来のことを予想(予測)し、想像し、期待しますが、その内容が必ず実現するという保障はどこにもありません。また、英語の動詞が述語動詞として機能する場合には、形態変化によって未来時制を表す方法がありません。そこで、英語の母語話者は助動詞(厳密には、法助動詞)を用いることにより、会話の意味内容には曖昧さが含まれているという痕跡を残します。聞き手は、その助動詞を頼りに、話し手がどの程度まで述語動詞の意味が実現すると信じているのかを推測します。例えば、少なくとも今のところ、会話の意味内容の実現を信じているというものから、未来のことなので暫定的に応じておこうとするものまでがあります。この法助動詞以外にも、話し手がどの程度の意味内容の実現を信じているのかは、程度を表す副詞句によっても表されます。こうした観点から、文の意味にたどり着くためには副詞句の役割が重要になるということも覚えておきましょう。

(3) 四つの様相

私たちは会話を通じてさまざまな情報を交換しています。そこで交換される情報量は、一般的に、その会話の長さや文字数に比例すると考えられます。英語は、比較的論理的な言葉なので、文の構造が情報量を左右するという考え方もできます。その基本となるのが言語の様相というもので、会話の中で詳しく説明していないことまでが相手に伝わるのはこの様相が要請する文の構造に拠るものです。ここでは、英語を話す人々が文構造を変えることでどのような意味を表とうとしているのかを観察しましょう。また、周辺の事態を主体的に認知する人間が、捉えた意味を表すために要請する傾向の強い文構造を整理しましょう。

① 単純相

その単純な構造は、情報量が最も少ないことを示唆しています。述語動詞には典型的な形態変化のみが加えられるため、単純相で表された内容は他の時制との関わりが希薄で、文字通りものごとを単純に捉えていることを表しているように感じられます。時間という概念からするとただ一点だけを表しているという印象がありますが、その単純さがゆえに曖昧さは排除され、断定的な表現(例えば、「宣言」や「宣誓」)として用いられることがあります。時制によっては意味する範囲が異なりますから、この単純相にも十分な警戒が必要と言える

でしょう。

② 進行相

進行相はBe動詞とともに現在分詞が要請されるため、本動詞の意味には動的な意味が付加されます。そのため、静的な意味（例えば、心の動き）を表す動詞は、進行相の中で使われることはありません。

特定の時制の中で、進行相にはその前後を担当する機能が備わっています。そのため、少し前に始まったことが進行中の状態にあり、すぐには終わりそうにははないということを表します。現在という時間を例にとれば、少しの過去と少しの未来をともに含意していることになりますから、「(たった今はどうか知らないが) このごろ～しているようだ」という意味や、「(すでに調整してある) ～の予定がある」という意味を表します。

Be動詞とともに going to が用いられると、「今ある時点から先に、あることが起こる」ということに加え、「それが実現する(であろう) 時間に着実に向かっている」ということが含意されます。そのため、この構文は話し手が既に調整された予定を表す場合や、ある意味の実現に関わる根拠が言い表されている場合に用いられます。

進行相には明確な時間の幅が示されませんから、動詞が担当する意味の時間的な範囲がいつからいつまでのことであるのかは問われません。この点が進行相と完了相との決定的な違いであることを覚えておきましょう。

③ 完了相

完了相とは、have 動詞と過去分詞によって特定の時制に至るまでの動作や状態の経過（状態の移り変わりや、継続）を表すものです。担当する意味の範囲には明確な時間の幅というものが示されていることが多く、それはその時制が示す時間までの期間や、動作・状態の始まりを示す起点として記されます。また、意味を担当する範囲が明示されているため、特定の時制に至るまでの継続や経験、その時点での完了、そして、その時点までに完了したことによる影響（結果）が含意されることになります。

中学校で初めて完了相を学習したとき、「経験・完了・継続・結果」という四つの機能が別々なものとして紹介されていました。しかし、実際にはこれらの機能が重複する部分を多く持ち合わせているということを観察しましょう。

④ 完了進行相

構造上、最も情報量の多いことを示す完了進行相は、have (has) been とそれに続く現在分詞で表されます。完了進行相は、その名が示すように完了相と進行相の機能が共存しているために、その機能が完了と進行の両面に揺れ動くことになります。この二面性から、完了進行相は場面や状況を認知する人間の意識が進行相に傾く場合と、完了相に傾く場合とを表

します。進行相に意識が傾く場合には、特定の時制以前に何かが始まり、その時点でもその何かが進行中であることを認知します。「前夜から降り出した雨が、今もなお降り続けている」ということを言い表したときには、完了相という時間の幅に加えて進行相が重複したものとしての完了進行相を要請することになるのです。

また、場面や状況を認知する人間の意識が完了相に傾くと、指定された時点において、それ以前に始まった何かはすでに完了しているけれども、その影響が痕跡として残されているということが理解されます。「鼻をすすっていて、目がまだ赤い（進行）」という事実から、目の前にいる人が「泣きやんでいる（完了）」けれども「ずっと泣いていた（継続）」ということを推し量ることになるのです。

表6のマトリックスで組み合わされた時制と様相は、下の表7にある授業計画に従って説明されます。それぞれに要請される文の形式から、そこに反映する意味を理解してください。

表7. 秋学期授業計画

Lesson 1	単純現在 (am/are/is, do/does)
Lesson 2	現在進行 (am/are/is + <u>ing</u>)
Lesson 3	現在完了 (have/has + <u>ed</u>)
Lesson 4	現在完了進行 (have/has been + <u>ing</u>)
Lesson 5	単純過去 (was/were, did)
Lesson 6	過去進行 (was/were + <u>ing</u>)
Lesson 7	過去完了 (had + <u>ed</u>)
Lesson 8	過去完了進行 (had been + <u>ing</u>)
Lesson 9	単純未来 (will be, will do)
Lesson 10	未来進行 (will be + <u>ing</u>)
Lesson 11	未来完了 (will have + <u>ed</u>)
Lesson 12	未来完了進行 (will have been + <u>ing</u>)

* ing は現在分詞、ed は過去分詞を表す

述語動詞の基本構造が理解できた人は、春学期に学習した名詞句とともに、英文の基本構造がわかり始めています。今すぐにでも簡単な英文を作り、それを更に発展させることによって、より多くのパターンを完成させてください。

PART 2. 文構成要素の統語配列関係

4. 春学期授業

意味の中心となる名詞が形容詞的用法を伴う語・句・節とともに一定の統語配列を成すとき、そこにはどのような意味が読み取れるのかを観察してゆきます。授業計画に従って12種類の組み合わせを順に観察すると、皆さんは英語の書き出しとしての主語、動詞や前置詞の目的語、be動詞などの補語として用いられる名詞句を理解することができます。さまざまな種類の英文を理解するためにも、意味のまとまりとしての名詞句を正しく理解してゆきましょう。

これから名詞句の基本構造を学習する上で、説明に用いられる省略文字を下の表8で確認しておきましょう。途中でわからなくなったら、このページまで戻ってきてください。

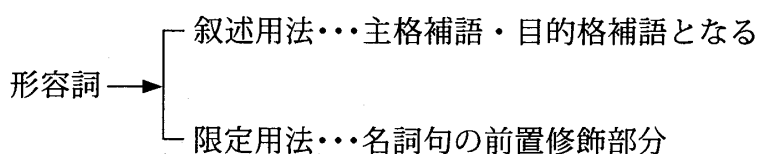
表8. 名詞句構成要素の省略表記

構成要素	英語	省略された表記
限定詞	Determiner	Det
前置修飾部分	Pre-Modification	Pre-M
意味の中心となる名詞	Head Noun	HN
後置修飾部分	Post-Modification	Post-M

Lesson 1: 形容詞＋意味の中心となる名詞

1. 構成要素の配列（構造）：（限定詞＋）形容詞 \ HN

形容詞の用法は「叙述用法」と「限定用法」とに大別されています。今回の授業で復習するのは、意味の中心となる名詞を直前から修飾する形容詞の限定用法です。この用法を用いた場合には、英語の名詞句が日本語の名詞句と同じ構造になりますから、それぞれを比較してみるとよりわかりやすくなるでしょう。



単独で形容詞がHNを修飾する場合には、必ずPre-Mの位置をとります。例外的なもの（例えば、else）が後置修飾をする場合には、HNとの意味的なかわりから起こることですから、そこには何らかの動機づけがあると考えられます。また、複数の形容詞がHNを修飾する場合には、下の表9のように一定の順序が要請されます。

表 9. 複数の形容詞の配列順序

	種 類	性 質	備 考
例外	all, both, such	限定詞より前	such as を除く
1	数量形容詞	数詞（数、序数など）	
2	性質・形状形容詞	主観的評価	話者の評価
		客観的評価	大小・形状・性質・状態・新旧・色彩
3	固有形容詞	eg: British, Chinese,	
4	物質形容詞	eg: wooden,	
5	名詞の形容詞的用法	eg: birthday, family	

例：both the two lovely little oval brilliant new purple Chinese wooden jewel \ boxes

Det

Pre-Mとしての形容詞

HN

(『ロイヤル英文法』より)

理論上は例のように長い Pre-M を伴った名詞句を作り出すことは可能ですが、発音上の制約やコミュニケーションの成立という観点から、例外として受け取ることができます。表にある「例外部分」と「数量形容詞」の配列には、話し手の認知能力や言葉の経済性が影響していることを反映していると考えられます。このほか、2 が明示しているように、形容詞によって表される名詞の属性というものが、話し手の主観的評価と客観的評価とで順序を決定しているという点は、いかに人間の認知が文法の成立に強く影響を及ぼすものであるかということを示す良い例と言えるでしょう。

客観的な評価の順序を決定づける法則は、人間の発達や言葉の習得過程にもかかわりのある問題です。遠い記憶をたどれば、視覚情報として身の回りのものが徐々に見え始めてくる中、人間は輪郭のあるものを目で追うようになり、そこから徐々に対象となるものの属性に意識が働くようになっていきます。この順序が複数の形容詞の配列関係に影響しているとなれば、言葉は人間の認知が要請した形式を反映しているものとして捉えることができます。

2. 例

- (1) an unbelievable story (信じられない話)
- (2) the Italian restaurant (イタリア料理のレストラン)
- (3) some fresh juice (新鮮なジュース)
- (4) any foreign languages (どの外国語も)
- (5) my sweet heart (優しい心／私の好きな人)

3. 練習問題

：次の日本語を英語にきなさい

- (1) 青い空
- (2) 高い山
- (3) 3枚の白いシャツ
- (4) 美しい紅いバラの花束
- (5) 彼の深緑の上着

：例として挙げられた名詞句を Pre-M と HN とに分けなさい

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)
- (5)

：カッコ内の形容詞を正しい順序で並べ替え、名詞句を完成させなさい

- (1) the (old, French) castle
- (2) his (yellow, new, big) hat
- (3) a lot of (young, black, fat) sheep
- (4) the (wooden, beautiful, new, black) bridge
- (5) my (British, dark blue, nice) coat

Lesson 2：形容詞句＋意味の中心となる名詞

1. 構成要素の配列（構造）：（限定詞＋）形容詞句 \ HN

この文構造の中で復習するのは、副詞句に直接修飾された形容詞が Pre-M として HN を修飾するものです。形容詞を修飾する副詞句は直前に配置されるので、形容詞句の厳密な構造には「副詞句 \ 形容詞 \ ＋意味の中心となる名詞」という配列が要請されています。

2. 例

- (1) some very small boxes
- (2) the incredibly expensive tax
- (3) the totally unacceptable offer
- (4) the relatively short notice
- (5) the gradually progressing plant

3. 練習問題

：次の日本語を英語にしてください

- (1) とても難しい質問
- (2) 徐々に明かされる理由
- (3) 辛らつに批判された意見
- (4) 不法に入国した人々
- (5) 社会的に妥当な戦略

：例として挙げられた名詞句を Pre-M と HN とに分けなさい

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)
- (5)

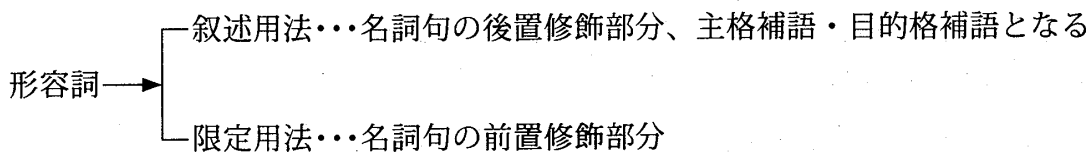
：練習問題の名詞句を用いて、例文を作りなさい

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)
- (5)

Lesson 3：意味の中心となる名詞＋形容詞句

1. 構成要素の配列（構造）：（限定詞＋）HN / 形容詞句

この授業で学習する形容詞句は Post-M として HN を修飾するものです。これまでは、限定用法の形容詞が名詞を修飾していましたが、後方から叙述用法の形容詞が名詞を修飾していることに注意してください。



2. 例

- (1) the lady next to you

- (2) the bank opposite to the hospital
- (3) some candidates inferior to me
- (4) the case similar to the previous one

3. 練習問題

：次の日本語を英語にきなさい

- (1) 公害に関連する開発
- (2) 介護が必要な老人
- (3) ヨーロッパに勝る技術
- (4) 誰にでも納得のいく説明
- (5) 新規開店の店

：例として挙げられた名詞句を Pre-M と HN とに分けなさい

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)

：練習問題の名詞句を用いて、例文を作りなさい

- (1)
- (2)
- (3)
- (4)

5. 秋学期授業

Lesson 1. 単純現在：日常の習慣・普遍の真理

単純現在で表された述語動詞の機能は、「始まりも終わりも無く、未来永劫（えいごう）」という意味で、その表現が用いられた時代や場所における常識的な判断や通説として解釈されるものです。また、現在進行では表現できないもの（心の動きや、場所・状態の変化）も、この形式で表されます。

<構造>

主語＋述語動詞（現在時制）～

→ 主語が三人称単数現在（三単現）のとき、述語動詞が変化することを注意しましょう

表 10. 進行形にならない動詞

英語	日本語	英語	日本語
like	～が好き	remember	～を覚えている
love	～を愛してる	depend (on)	～に依存している
want	～が欲しい／～したい	believe	～を信じている
know	～を知っている	need	～を必要としている
understand	～を理解する	hate	～を憎む

<例文>

- (1) The sun rises from the east and sets in the west.
- (2) Water flows to the lower.
- (3) He takes a walk for thirty minutes every morning.
- (4) They get up at six.
- (5) I hereby name this ship Jenny.

<ワンポイント>

：日常の習慣とは、我々が毎日の生活の中で繰り返し行なっていることである

→ 習慣を表す語句（いつも、たいてい、毎日）に注意。every day/usually/sometimes

→ 絶え間なく繰り返されることは単純現在で表される

：普遍の真理とは、同じことを大勢の人に尋ねた時、十中八九同じ答えとなるようなこと

→ 太陽が東から昇ることや、1気圧の環境では水が100℃で沸騰することなど

→ 時代の移り変わりや科学の発展によって、表すことができる範囲が変化する

Lesson 2. 現在進行：とりあえず今のところ～の最中、～する予定（計画済み）

動作や状態の進行とは、『（とりあえず）今のところ～している最中』という意味だけが表されていて、その「始まり」と「終わり」は不確定のままで言及されていません。動作や状態の「終わり」の部分が未来時制に及んでいることにより、状況から判断して起こる可能性が高い未来や予定を表すことに注意しましょう。また、「Be動詞＋going to＋原形不定詞」を用いた構文は、現在進行であることを再確認しておきましょう。

<構造>

主語 + Be 動詞 (am/are/is) + 現在分詞 ~

→ 主語の数や性質によって Be 動詞を選択する必要がある

<例文>

- (1) She is reading Soseki.
- (2) The boys are playing football.
- (3) He is coming next Monday.
- (4) It is raining.
- (5) We are not going to the party.

<ワンポイント>

: かなりの程度で到達する予定は、現在進行の中でも「Be 動詞 + going to + 原形不定詞」を用いた構文が好まれる傾向にあります

: 現在進行が表す「未来 (予定)」と「単純未来 (will)」の違いを説明してください

Lesson 3. 現在完了

過去のある時点から現在まで、継続的に動作や状態の影響が及んでいることを表すには現在完了が用いられます。過去のある時点からの影響なので、起点（その影響の始まり）や期間（どれだけ継続しているのか）が明示されることがあります。現在まで含む影響なので、特定の過去を表す語句とともに用いられることはありません。

中学や高校では4つの機能（完了・経験・継続・結果）を分割して学習しますが、どの機能も複数の機能を含意している点に注意しましょう。

<構造>

主語 + have/has + 過去分詞

→ 主語が三人称単数現在（三単現在）のとき、動詞は have から has に変化する

<例文>

- (1) I have been to Australia.
- (2) She has just gone to the hospital.
- (3) We have cancelled the flight.
- (4) You have not submitted the paper yet.
- (5) He has been in the same situation since last year.

<ワンポイント>

- : 過去のある時点に起こり、その影響が今も継続しているか（継続）
- : 過去に起こったことにより、現在の状況にある（結果）
- : これまでの経験
- : 過去にはじめたことが終わった（完了）
- : 起点の since、期間の for

6. 今後の学習計画

これまでの復習を通じて、高校までに学んだ英語の復習はどの程度できましたか。この教材がこれまで直接の言及をしてこなかった項目を下にまとめます。皆さんが必要と思うものから順に選んで、しっかりと英語の基礎を固めてゆきましょう。授業形式で13回に分割されていますが、12週目と13週目以外の授業は、基本的に自分のペースで学習することを前提としたプログラムです。

表 11. 高校の復習に必要な項目

	項目	下位区分	チェック ボックス	
1	基本構文	5 文型		
2	準動詞	不定詞		
		分詞		
		動名詞		
3	副詞句	副詞（句）		
		前置詞（句）		
4	語彙	名詞		
		動詞		
		形容詞		
5	慣用表現	熟語表現		
6	構文（1）	仮主語の構文		
		強調構文		
		関係代名詞		
		関係副詞		
7	名詞の分類	可算名詞と不可算名詞		
		冠詞		
8	動詞の分類	自動詞と他動詞		
		意味の範囲（意味達成の程度）		
		他動性		

9	形容詞の用法	比較級		
		最上級		
		比較構文		
10	構文 (2)	能動態と受動態		
		話法		
		仮定法		
11	構文 (3)	倒置・省略など		
		構文の意味		
		無生物主語の構文		
12	まとめ	まとめのテスト (TOEIC or CASEC)		
13	総復習	自学自習		